九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[102] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10165

出版情報：語文研究. 102, 2006-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

《会員著書紹介》

目加田さくを・中井一枝・堀志保美　注釈

『小侍従集全釈』

本書は、松平文庫本『小侍従集』・同『小侍従集別本』を底本とし、十五本に及ぶ諸伝本との異同をふまえて、全三一四首に全釈を施したものである。また、解説においては、諸伝本系統についての考察、および、作者である小侍従の生涯について、その家系をはじめ詳しい説明がなされている。構成は以下の通り。

解説
一　諸本
　現存本「小侍従集」の諸本について／「小侍従集」の成立について／「左大将家百首」について／「後京極摂政百首歌」について／「小侍従集別本」について
二　作者
　1　家系　父系／母系／夫とその一族／小侍従の子
　2　小侍従　出仕・結婚／恋愛／交友関係／出家前後／晩年と後世
全釈
凡例
小侍従集
小侍従集別本
松平本になく書一・書二・丹・黒・群にある歌
関係資料
歌合の小侍従歌
他家集中の小侍従歌
物語・説話・謡曲・歌論書　―小侍従関係（抜粋）―
年表
主な引用・参考文献
初句索引

（平成十七年十二月　新典社　A5判　四三〇頁　一三、六五〇円）

筑紫国語学談話会　編

『筑紫語学論叢Ⅱ―日本語史と方言―』

本書は、本学迫野虔徳教授のご退職と筑紫国語学談話会二十五周年を記念して編まれた論文集である。「日本語史と方言」というテーマを掲げ、「新たな研究の方向性」を目指す

内容は、以下の通り。

上代日本語母音調和覚書（早田輝洋）／〝たまげる〟と〝たまぎる〟（前田富祺）／「夜の衣を返してぞ着る」の意味－『古今集』五五四番歌考－（山口佳紀）／高野山宝寿院蔵『蒙求抄』について（柳田征司）／時刻名の転義用法（鈴木丹士郎）／『交隣須知』の成立存疑（迫野虔徳）

Ⅰ　音韻・表記

萬葉集における非単独母音性の字余りの性格－A群とB群の関わりから－（佐野宏）／鎌倉時代擬音擬態語と特殊拍（江口泰生）／四つ仮名と前鼻音（高山倫明）／近松浄瑠璃におけるハ行四段動詞音便形について－時代物と世話物の言葉－（奥村和子）／藍庭晋瓶（晋米）浄書　草双紙類の仮名遣の実態　－『敵討余世波善津多』及び『正本製　五編　難波家土産』－（矢野準）

Ⅱ　文法

「（さ）せらる」（尊敬）の成立をめぐつて（堀畑正臣）／タリからテアルへ（山下和弘）／クダサルの人称制約の成立に関して（荻野千砂子）／原因主語他動文の歴史（青木博史）

Ⅲ　語彙

「けしき」をめぐって（二）－古代の「気色」の特色－（辛島美絵）／真福寺本将門記における「合戦（カフセン）ス」と「合戦（アヒタタカ）フ」（山本秀人）／「いいかげん」の意味・用法の変遷（前田桂子）／「よほど」の使用条件の変化（播磨桂子）／〝返り討ち〟の意味変化について－《気づかない意味変化》の一例として－（新野直哉）／外来語成分の造語をめぐつて（林慧君）

Ⅳ　文献

『物類称呼』巻二「動物」の典拠について（田籠博）／肥後近世文献に見る方言－『嶋屋日記』と『上田宜珍日記』－（藤本憲信）／江戸語資料としての『はまおき』（山県浩）／『俚言集覧』『増補俚言集覧』における『今昔物語』からの引用について（岡島昭浩）／明治期対訳辞書『英語節用集』所載カタカナ表記英語語形をめぐつて　－『薩摩辞書』との比較対照調査報告－（坂本浩一）

Ⅴ　方言

九州方言の可能形式「キル」について－外的条件可能を表す「キル」－（木部暢子）／福岡方言と朝鮮語釜山方言の疑問詞疑問文の音調（久保智之）／対馬方言の敬語　－『交隣須知』を資料にして－（高橋敬一）／沖縄首里方言における複合名詞音調規則について（崎村弘文）／来間島方言の格助詞（杉村孝夫）

（平成十八年五月　風間書房　A5判　六〇四頁　一七、八五〇円）

花田俊典 著

『沖縄はゴジラか
―〈反〉・オリエンタリズム／南島／ヤポネシア―』

本書は、二〇〇四年六月に急逝した前九州大学大学院比較社会文化研究院教授・花田俊典氏の「沖縄」をめぐる論考ならびに書評を収録したものである。

「第Ⅰ章　沖縄現代文学とオリエンタリズム」では、一九九六年十二月に那覇市で行われた「沖縄文学フォーラム」での発言と、沖縄県出身の作家である又吉栄喜、目取真俊、崎山多美の作品評とに表出する、オリエンタリズムに偏向した「沖縄文学」認識への懐疑を出発点とした論考が展開される。

続く「第Ⅱ章　国家言語と南島論」では、戦時下に沖縄県学務部と「月刊民芸」グループとの間で起きた「沖縄方言論争」、吉本隆明の南島論における「沖縄方言」ひいては「言語」の抱える問題を取り上げる。

「第Ⅲ章〈シマ〉と〈ヤポネシア〉崎山多美・大城立裕・島尾敏雄の時空へ」では、章題に挙げられた三人の作家にとっての〈シマ〉、さらには七十年代の「ヤポネシア・ブーム」における谷川健一の功罪を論じ、「第Ⅳ章　花田俊典が読む」では書評という形で「沖縄」を捉えている。

遺稿となった「第Ⅴ章《講演・遺稿》大きな物語と小さな物語」では第Ⅰ章から第Ⅲ章における成果を踏まえた上で、「私たち」という主語を使うことへの違和を表明し、「日本」に根付くオリエンタリズムの強固さを喚起している。

巻末には、崎山多美によるエッセイ「小さな物語を大きな声で叫べ」が寄稿されている。

（平成十八年五月　A5判　花書院　三三六頁　二、八〇〇円）

川平敏文 著

『兼好法師の虚像　偽伝の近世史』

従来、兼好伝に関する研究の多くは、後代に付与された兼好像というベールを剥ぎ、その実像に迫ろうとするものであった。しかしながら、本書は、そうして剥ぎ取られてきた衣、すなわち兼好に纏わる偽記録、伝記物語に光を当て、兼好観の変遷を明らかにしたものである。本書の構成は次のとおり。

序　章　偽伝以前―二つのイメージ
第一章　『園大暦』偽文の誕生伊賀と兼好
一　偽伝の概要／二　伊賀国地誌と兼好伝／
三　頓阿・弘融・兼好／四　兼好塚の発見／
五　増補の開始と流布

第二章　増殖する偽伝―「好色ノ法師」から「真しき隠者」へ
一　二つの兼好像／二　真しき隠者の系譜／
三　増補の背景と意図／四　伝記物語の創作
第三章　芭蕉と兼好伝『更級紀行』と晩年の句
一　木曽路と兼好／二　『更級紀行』の背景／
三　「ありあけも」吟をめぐって／四　伝芭蕉写『蘭太暦』
第四章　『園太暦』偽文と芭蕉記念館本『蘭太暦』追考
一　記念館本の構成／二　『拾遺抄』と記念館本／三　成立過程の推論／四　支考の証言／五　記念館本と『徒然の讃』／六　笈の中身
第五章　兼好と南朝―イメージの形成と『太平記秘伝理尽鈔』
一　問題意識の源流／二　艶書代筆事件の真相
第六章　南朝忠臣説の構造―土肥経平の思考回路
一　南朝正統論の歴史／二　経平の『読史余論』評／三　烏丸光胤の邂逅
第七章　兼好の「ますらをごゝろ」―大国隆正の思想と趣向
一　国学者たちの兼好評／二　隆正の兼好伝解釈／三「やまとごゝろ」の言説／四　徒然草の再読／五　時代思潮としての忠臣説／六　読本的なる思考
終　章　偽伝の終焉―江戸から明治へ
付　論　兼好塚の文学―常楽寺蔵・近世兼好伝資料解題

江戸期兼好像に関する論考を軸として、その範疇は室町から明治期に及び、兼好没後に如何なる虚像が創造されてきたか通観できるものである。

また、巻末には「兼好塚の文学」と題して、利生山常楽寺に蔵される兼好関連資料二四点の詳細な解題が付されており、氏の論考の根底をなす一次資料の数々を知り得るものとなっている。

（平成十八年九月　平凡社　B6判　三一六頁　二、八〇〇円）

田坂憲二　著
『大学図書館の挑戦』

著者は、日本古典文学を専門とする著名な研究者で、普段はもっぱら図書館を利用する人である。ところが立場が一転して、勤務先の福岡女子大学の附属図書館で4年間、利用者サービスを提供する館長の職を兼任した。本書は、書誌情報の充実、図書博物館への道、図書館ツアーの実施、所蔵資料展特集形式の試み、検索システムの改善提案など、具体的にして果敢なる「大学図書館の挑戦」としての貴重な記録である。

「ＷＥＢＣＡＴ　ＰＬＵＳ」は、人間の思考方法に近い連想検索機能を有し大量情報の中から必要な図書を効率的に検索できるシステムであるが、著者はこれを補う手段として、目次情報を網羅しキーワード検索できるように、さらにフリーワード検索を加えて3本立てによる、利用者が自分の手持ち情報に応じて使い分けできるよう提案する。

しかし何と言っても、田坂館長の手腕は大学図書館の実践「所蔵資料展特集形式の試み」で発揮されたことだろう。「町春草の著書と装丁本」「ダニエル・デイ＝ルイスで読む英米文学」「小津安二郎をめぐって」「古書目録とオークション」「川端文学と美の世界」など、これまでのシンボリズム的大学図書館のイメージを遙かに超えて、いかに魅力ある図書館づくり、蔵書の新たな学問的価値観を打ち立てようとする。

その志の高さに感動し敬意を表したい。大学は学問をする所。学問を始めようとする学生には必読の書。

目次は次の通り。

1、大学図書館の実験
2、大学図書館の実践
3、『川端康成全集』とＮＡＣＳＩＳ　ＷＥＢＣＡＴ
4、ＮＡＣＳＩＳ　ＷＥＢＣＡＴとＷＥＢＣＡＴ　ＰＬＵＳ

（平成十八年十一月　和泉書院　Ｂ６判　二三五頁　二、五〇〇円）